

長濱、青瀬、手打に至る。——串木野を正午過ぎ發し、手打に着くのは午後の十時である。船脚まことにのろし。小蒸氣船三隻。船賃は恐ろしく高し。

2、生活の一つ

私は今夏八月十九日手打を發し、片野浦に至り、飲まず食はずやつとの事で瀬尾(青瀬)に到着した。片野浦に店の一つ位はあらうと中食を用意しなかつたのが失敗だつた。瀬尾に驟雨の中に着いたのであつた。腰をかけて休む様な家は見つからない。やつとのことで小さい店が見つかつた。菓子は無い。小さい梨があつた。硬くて齒がいたい。夕方になつて子供が瓶を持って来る、ザル(籠)を持って来る。そして鹽十錢、砂糖五錢、醬油一合、ローソク一本、石油一合等と買つて行く。今日お母さんが賣

江 南 再 遊

一、排日の聲

昭和三年十二月二日午後一時、長崎丸はチョコレイト色の江水を蹴つて、堂々として吳淞に入つた。こゝから十二哩黃埔江を溯るのである

江南再遊

3、サンゴ

つて来た魚代で買つて行くのであらう。産地は北緯三十一度十八分三十秒、東經百二十九度四十四分に位する津倉(筑良島)及び其の西南、宇治島で毎年三月より十月まで、手打港を根據として採集された。明治二十八年頃より大正十三年頃まで作業をなし、現在は中止してゐる。

土佐・五島の發動船が集まり、天氣が良好であるならば一週間乃至十日間位づゝ作業し、最盛期の明治四十年頃は船數四十を越え年額四十萬圓に上つた。現今は市價の暴落と産額激減の爲に收支償はず、中止するの止むなきに至つた。

藤 田 元 春

狭くて浅い江中に無數の大艦巨船が入つてゆくのであるから浚渫の工事は絶間なしに行はれてゐる。今も吳淞港頭左岸に泥を掬ひ上げて、方四五町の千田がつくられつゝあるのも面白い。

三三 四三

會てこゝに入つた時第一に目がついた仁丹の大廣告が無くて、之に代るに俗惡な冠生園の陳皮梅や半ば破れた烟草の猛虎牌などの大看板が目に入る。どうしたところかとさきくと、本年六月二十九日のことである。日本の山東出兵に對する反對運動として、その日、吳淞に排日大會が催された、その大會の歸途、數百の工人連が黃埔江岸にあつたかの仁丹と中將湯の大廣告を叩きこわし、更に附近に在る英米烟草のルビー、クキンの廣告をも共に破つたのである。

仁丹は就中最大の廣告で、大さは横六間、縦九間、實に東洋第一の稱があつた、その土基は地下數丈の所からコンクリートを以て築き、如何なる暴風にも貧乏ゆるぎ一つもしなかつたものである。經費五六千元以上であつた、東亞公司としては莫大な損害である。中將湯は之に比して小さいが、それでも八百元をかけたものであつた。何れも鋸を以て柱を切斷し針金を截ち看板は滅茶々にこわされた。

かうした外觀上の排日の外に、事實上日貨の

うけた排斥は著しいものでその後間斷なく對日經濟絶交委員會を開き、對日經濟絶交、國貨提唱、帝國主義打倒、北方殘餘の軍閥肅清、中國共產黨の撲滅、中國國民黨擴張、三民主義萬歲國民政府萬歲、かういつた口號（うたいごう）を實行せんことに努力した。

七月十三日には突如として支那側銀行が日本の銀行に對し弗の交換を拒絶したために、邦人紡績業者の多數の支那職工に細かい賃金を仕拂はねばならぬ所では非常に迷惑をした。七月十五日には内外棉會社では北伐戰勝記念會などいって、罷業を斷行した。しかしもしさうした邦人の企業にかゝる紡績全部が休業すれば、職工六萬人、その家族五人宛とみても凡そ三四十萬人からの市民の生活に關するので、この方は時勢の推移に任されてゐた。一方支那の商人も日貨だといへば沒收されるので、その受けた打撃は大きかつたが、七月二十二日南京政府から排日貨中止の命令が出て、排日行動は頓挫した。打撃をうけたのは紡績のみでなく、輸入の棉糸

毛布、海産物、日本へ輸出すべき菜種、種粕、
麩皮等百般の貨物が差押へられ、同時に賣買が
停止したので、彼我共に困つた。

緩和したのは七月十七、八日頃からで、その
理由はかやうな排日貨をやると、北伐に大切な
軍需品、火薬の材料、石炭、冬服等の供給にも
こまるからであつた。そこでこれは市黨部の人
々の勝手な行爲で、南京政府の意志でないとい
ふことになり、いろいろ政府から之を押へたの
で、それ自身に支那商人を死地に導く暴擧であ
ることがわかつて、結局は龍頭蛇尾に終はつた
のではあるが、しかし支那人は之を外交問題に
利用して排日を容易に終熄しない。我等の渡支
する頃の十一月末の時報にも、

中日交渉愈勞愈緊、生死關頭係此舉、凡我國
民均應注意、惟日本譎詐成性。
なご、論ずる調子であつた。

二

我等はさうした排日の空氣の中に、上海につ
いた。日本租界内では棉布が廉いが、排日貨の

ために品減りで支那の領土では高い。一梱に五
十圓の開きがある。壁に穴をあけたり、夜陰に
糾察隊の眼をくらまして、これを運び込めば、そ
れ丈け儲かるのであるから、私腹を肥やす黨部
の人も出來た。思はぬ利益を得た商人もあつた
のであるから、一旦味をしめた人々は排日貨を
中止しないやうになる。さうした次第で我等の
上海に入つた當時は、猶排日貨の聲がやかまし
く、上海での國貨展覽會は連日大入滿員の盛況
であつて支那の民衆には、深く排日の感情が濕
潤してゆくかの感があつた。蓋し今日の支那の
智識階級の中には、日本の對支貿易は、日本に
あつては生命の源である所の原料品の輸出であ
る。すべて日本の近代工業の必需品である。も
し中國内に工業が發達したらば日本の需要を待
つ必要がない。故に日本と經濟絶交をすれば、
日本の工業がつぶれ、かはりに支那にその工業
が起るのだといふ空想を持つものが多い。しか
し果してさうしたことになるだらうか。これは
日本の人も眞面目に考へるべき問題である。

實際の事情を云へば、今日の支那は永い間外國と貿易をして日本のみでない歐米各國からの工産物を輸入したために、外國の器械工業の安價な生産物と競争が出来ないで、その過去の家内工業は殆ど失はれかけてゐる。支那の傳統的工業の花ともいふべき陶器、これは景德鎮の窯業は今も猶有名ではあるが、在來の家具を産するに止まつて、上海での西洋陶器といへば、すべて支那産ではない。過去の織物としての綢緞縐子の類といへども、絹糸紡績の發達に伴つて外國から安價な緞子や縐子が入つてきて、しかもそれが支那の國貨として賣れてゐるのである。日貨は排斥されて燐寸、煙草、ビール等廿年以前支那四百州を風靡した勢は、今日には再び見ることが得ないけれども、綿布や綿糸は右に排斥して左に受け入れざるを得ない程度に、その工業は萎縮してゐるのである。

工業の起るためには資本がいる、交通機關の改善熟練職工の養成、その他數へ來れば數限りもないが、第一に政情の安定と國內の平和が永

くつゞく必要がある。漢冶萍公司の漢陽製鐵、大冶の熔鑛爐、萍鄉の採炭、すべてが休息して二年にもなるといふやうな不安な今日の政情に於て、斷乎として日本への輸出を禁じたとすれば、たれがその原料を買つてくれるであらうか。英米諸國の工業は、それ自身に於て工業原料の消費に適應した作業をしてゐる。遠い支那から持つて歸るものは毛皮或は羊毛、駱駝毛位のものである。支那の生糸はデニールが揃はぬので、相場の格付けにさへ上されてゐない程度である。支那では既に百般の工業が萎縮してゐる。支那では既に百般の工業が萎縮してゐるからその力で無限の原料を消化し能はない時、彼等は日本を除外して何所にその原料を向けやうとするのであらうか。大冶の鐵鑛の如きは日本との特約があるので、この排日の最中にも猶罷業はしないで孜々としてその鑛石を運搬してゐたのであつたが、もしも日本が支那の排日貨に對して本氣に怒つて、それを用ひないと同時に日貨を他の方面南洋、中央アジア、アフリカの方面へ轉賣するやうに努力したとすれば、支那

はごうしてその日常生活の必需品を得るであらうか、勿論英米其他の國々からの輸入も爲に増加するであらうが、英米二國の高い品物を用ひねばならぬやうになつた時の支那の貧民はごうするであらうか。蓋し日支親善といふことは、支那の一部の識者が考へるやうに、日本の爲めのみの事ではない。日本の人も日支親善によつて日本のみの利益をうけるやうに考へてはならぬ。何はともあれ今日の支那の心から要求するものは強固な政府を以て國情の安定することである。これは外交關係の上に求めらるべき者でない。四萬萬民の内面的努力に待たねばならぬ。故に我等はさうした覺醒の支那に十分の敬意を拂うと同時に、徒らに排日の聲を大にして私利を事とする一部の人士に猛省を促さざるを得ない。

二、上海の日本人

上海の日本人在留約三萬人と稱せらるゝ。近頃は上記の排日騒があつてから、支那労働者が中々云ふ事をきかぬくせが出來て、昔日のやうに安價な使用人を得られなくなつた。いつ出て

行くかわからぬし、いつ多數の聲で黨の命令だといつて、賃銀の値上げとか、安息日の要求とかをするかもしれない。とはいふものゝ、さうした黨務の活動が休止すると同時にさきに要求した賃銀や、公休日などの事は全く忘却した形で、排日以前の條件に復舊する。さうした事實は上海のみでなく、九江でも、漢口でも、大治でも同様であつたのである。

上海市の北方、英租界の西部、虹口マーケットの附近は日本人の集まつてゐる所で、日本式の店が多い。若きも老たるも、國家の前線に立つて活動してゐるので元氣がよい。ことに長崎との距離が近い、たつた二十四時間である。午前十時に出ると、翌日の午後一時には長崎に入る。一晚ねたら長崎であり、上海である。九州の人が東京に行くよりも遙かに樂である。茲に於てか在上海の日本人には、長崎や熊本が多い、長崎縣上海だといつてゐる。連絡船の工作がわるくて、ダイゼルの機回轉に伴つて、船が小さい左右のローリングをやる。浪のウネリよりも不

快な震動であるから、酔はぬにしても氣持がよくない。一等と三等で、二等がないが、それは一等のCに相當するけれども船賃が少しく高い三等をも少し美はしくして、今の二倍位で往復するやうにしたい。長江通ひの日清汽船も一等は特別に高いが、支那一等(官船)が賃銀四分の一、これはあまりに段がつきすぎる。せめて今の一等の二分一位できもちのよい旅行が出来るやうにしてほしい。上海航路の三等を引き上げて二等がほしいといふのと、この長江の二等がほしいといふことは、日本人の現状から見て適當な要求である。船會社はその設立當時の舊慣を墨守してはいけない。時代の要求に最適の設備をしてくれねばこまると思ふ。蓋し日本は只今位の少數の人を上海や長江筋に送くつて満足してはならぬ、と思ふからである。

上海に居る日本人は近頃になつて、多數の上海生れの児童を持つやうになつた。昭和三年十二月の調査による民間立小學校は就學児童二千人を突破し小學校が三つあるが、猶不足するの

で、昭和四年四月から中部小學校を増設すると同時に、視學を置くといふ勢になつてゐる。最近三年間の入退學卒業の數は左表の通りである。聞く所によると二三年後になつて、今日紡績會社に來てゐる人々の幼童が學齡に達する頃には學校も猶倍加しなければならぬといはれる。

そこで問題になるのはこれら小學校卒業生の更に進むべき中等教育機關である。大正九年に高等女學校が創立されて、本年第七回の卒業生を出し累計百七十八名に達した。今の校長は知友高久純三君である。教頭も亦知己水口民次郎君である。附屬の幼稚園もある。學校の設備は十分とはいへぬが、しかしその子女の淳朴な好學の心に燃えた教場を參觀した時の予の驚嘆は筆紙に盡くすことが出来ない。予はかうした民間の努力を感激すると同時に、中學校の設立の急務であることを痛感した。

中學校が何故に遅くれたかといへば、民間の中での有力な會社員銀行員などの高級生活者はいづれも今日迄は自分の子を内地に送くつてゐ

最近三年間ニ於ケル上海居留民國立小學校調査事項(昭和三年十二月十二日調査)

計	北 部		東 部		西 部		小 學 校		入 學 兒 童 數	五 學 年 退 學 者 數	卒 業 者 數	中 等 入 學 志 願 者 數
	女	男	女	男	女	男	女	男				
	一四	二五	一六	二〇	一	一	一	一	一年二年三年計	一年二年三年計	一年二年三年計	一年二年三年計
	二五	二九	三三	三六	二	二	二	二	一	一	一	一
	二〇	二五	二五	二八	三	三	三	三	二	二	二	二
	二六	三〇	三三	三五	四	四	四	四	三	三	三	三
	二二	二六	二八	三〇	五	五	五	五	四	四	四	四
	二五	三〇	三二	三五	六	六	六	六	五	五	五	五
	二〇	二四	二六	二八	七	七	七	七	六	六	六	六
	二四	二九	三一	三五	八	八	八	八	七	七	七	七
	二八	三三	三五	三九	九	九	九	九	八	八	八	八
	二二	二七	二九	三一	一〇	一〇	一〇	一〇	九	九	九	九
	二六	三一	三三	三五	一一	一一	一一	一一	一〇	一〇	一〇	一〇
	二〇	二五	二七	二九	一二	一二	一二	一二	一一	一一	一一	一一
	二四	二九	三一	三五	一三	一三	一三	一三	一二	一二	一二	一二
	二八	三三	三五	三九	一四	一四	一四	一四	一三	一三	一三	一三
	二二	二七	二九	三一	一五	一五	一五	一五	一四	一四	一四	一四
	二六	三一	三三	三五	一六	一六	一六	一六	一五	一五	一五	一五
	二〇	二五	二七	二九	一七	一七	一七	一七	一六	一六	一六	一六
	二四	二九	三一	三五	一八	一八	一八	一八	一七	一七	一七	一七
	二八	三三	三五	三九	一九	一九	一九	一九	一八	一八	一八	一八
	二二	二七	二九	三一	二〇	二〇	二〇	二〇	一九	一九	一九	一九
	二六	三一	三三	三五	二一	二一	二一	二一	二〇	二〇	二〇	二〇
	二〇	二五	二七	二九	二二	二二	二二	二二	二一	二一	二一	二一
	二四	二九	三一	三五	二三	二三	二三	二三	二二	二二	二二	二二
	二八	三三	三五	三九	二四	二四	二四	二四	二三	二三	二三	二三
	二二	二七	二九	三一	二五	二五	二五	二五	二四	二四	二四	二四
	二六	三一	三三	三五	二六	二六	二六	二六	二五	二五	二五	二五
	二〇	二五	二七	二九	二七	二七	二七	二七	二六	二六	二六	二六
	二四	二九	三一	三五	二八	二八	二八	二八	二七	二七	二七	二七
	二八	三三	三五	三九	二九	二九	二九	二九	二八	二八	二八	二八
	二二	二七	二九	三一	三〇	三〇	三〇	三〇	二九	二九	二九	二九
	二六	三一	三三	三五	三一	三一	三一	三一	三〇	三〇	三〇	三〇
	二〇	二五	二七	二九	三二	三二	三二	三二	三一	三一	三一	三一
	二四	二九	三一	三五	三三	三三	三三	三三	三二	三二	三二	三二
	二八	三三	三五	三九	三四	三四	三四	三四	三三	三三	三三	三三
	二二	二七	二九	三一	三五	三五	三五	三五	三四	三四	三四	三四
	二六	三一	三三	三五	三六	三六	三六	三六	三五	三五	三五	三五
	二〇	二五	二七	二九	三七	三七	三七	三七	三六	三六	三六	三六
	二四	二九	三一	三五	三八	三八	三八	三八	三七	三七	三七	三七
	二八	三三	三五	三九	三九	三九	三九	三九	三八	三八	三八	三八
	二二	二七	二九	三一	四〇	四〇	四〇	四〇	三九	三九	三九	三九
	二六	三一	三三	三五	四一	四一	四一	四一	四〇	四〇	四〇	四〇
	二〇	二五	二七	二九	四二	四二	四二	四二	四一	四一	四一	四一
	二四	二九	三一	三五	四三	四三	四三	四三	四二	四二	四二	四二
	二八	三三	三五	三九	四四	四四	四四	四四	四三	四三	四三	四三
	二二	二七	二九	三一	四五	四五	四五	四五	四四	四四	四四	四四
	二六	三一	三三	三五	四六	四六	四六	四六	四五	四五	四五	四五
	二〇	二五	二七	二九	四七	四七	四七	四七	四六	四六	四六	四六
	二四	二九	三一	三五	四八	四八	四八	四八	四七	四七	四七	四七
	二八	三三	三五	三九	四九	四九	四九	四九	四八	四八	四八	四八
	二二	二七	二九	三一	五〇	五〇	五〇	五〇	四九	四九	四九	四九
	二六	三一	三三	三五	五一	五一	五一	五一	五〇	五〇	五〇	五〇
	二〇	二五	二七	二九	五二	五二	五二	五二	五一	五一	五一	五一
	二四	二九	三一	三五	五三	五三	五三	五三	五二	五二	五二	五二
	二八	三三	三五	三九	五四	五四	五四	五四	五三	五三	五三	五三
	二二	二七	二九	三一	五五	五五	五五	五五	五四	五四	五四	五四
	二六	三一	三三	三五	五六	五六	五六	五六	五五	五五	五五	五五
	二〇	二五	二七	二九	五七	五七	五七	五七	五六	五六	五六	五六
	二四	二九	三一	三五	五八	五八	五八	五八	五七	五七	五七	五七
	二八	三三	三五	三九	五九	五九	五九	五九	五八	五八	五八	五八
	二二	二七	二九	三一	六〇	六〇	六〇	六〇	五九	五九	五九	五九
	二六	三一	三三	三五	六一	六一	六一	六一	六〇	六〇	六〇	六〇
	二〇	二五	二七	二九	六二	六二	六二	六二	六一	六一	六一	六一
	二四	二九	三一	三五	六三	六三	六三	六三	六二	六二	六二	六二
	二八	三三	三五	三九	六四	六四	六四	六四	六三	六三	六三	六三
	二二	二七	二九	三一	六五	六五	六五	六五	六四	六四	六四	六四
	二六	三一	三三	三五	六六	六六	六六	六六	六五	六五	六五	六五
	二〇	二五	二七	二九	六七	六七	六七	六七	六六	六六	六六	六六
	二四	二九	三一	三五	六八	六八	六八	六八	六七	六七	六七	六七
	二八	三三	三五	三九	六九	六九	六九	六九	六八	六八	六八	六八
	二二	二七	二九	三一	七〇	七〇	七〇	七〇	六九	六九	六九	六九
	二六	三一	三三	三五	七一	七一	七一	七一	七〇	七〇	七〇	七〇
	二〇	二五	二七	二九	七二	七二	七二	七二	七一	七一	七一	七一
	二四	二九	三一	三五	七三	七三	七三	七三	七二	七二	七二	七二
	二八	三三	三五	三九	七四	七四	七四	七四	七三	七三	七三	七三
	二二	二七	二九	三一	七五	七五	七五	七五	七四	七四	七四	七四
	二六	三一	三三	三五	七六	七六	七六	七六	七五	七五	七五	七五
	二〇	二五	二七	二九	七七	七七	七七	七七	七六	七六	七六	七六
	二四	二九	三一	三五	七八	七八	七八	七八	七七	七七	七七	七七
	二八	三三	三五	三九	七九	七九	七九	七九	七八	七八	七八	七八
	二二	二七	二九	三一	八〇	八〇	八〇	八〇	七九	七九	七九	七九
	二六	三一	三三	三五	八一	八一	八一	八一	八〇	八〇	八〇	八〇
	二〇	二五	二七	二九	八二	八二	八二	八二	八一	八一	八一	八一
	二四	二九	三一	三五	八三	八三	八三	八三	八二	八二	八二	八二
	二八	三三	三五	三九	八四	八四	八四	八四	八三	八三	八三	八三
	二二	二七	二九	三一	八五	八五	八五	八五	八四	八四	八四	八四
	二六	三一	三三	三五	八六	八六	八六	八六	八五	八五	八五	八五
	二〇	二五	二七	二九	八七	八七	八七	八七	八六	八六	八六	八六
	二四	二九	三一	三五	八八	八八	八八	八八	八七	八七	八七	八七
	二八	三三	三五	三九	八九	八九	八九	八九	八八	八八	八八	八八
	二二	二七	二九	三一	九〇	九〇	九〇	九〇	八九	八九	八九	八九
	二六	三一	三三	三五	九一	九一	九一	九一	九〇	九〇	九〇	九〇
	二〇	二五	二七	二九	九二	九二	九二	九二	九一	九一	九一	九一
	二四	二九	三一	三五	九三	九三	九三	九三	九二	九二	九二	九二
	二八	三三	三五	三九	九四	九四	九四	九四	九三	九三	九三	九三
	二二	二七	二九	三一	九五	九五	九五	九五	九四	九四	九四	九四
	二六	三一	三三	三五	九六	九六	九六	九六	九五	九五	九五	九五
	二〇	二五	二七	二九	九七	九七	九七	九七	九六	九六	九六	九六
	二四	二九	三一	三五	九八	九八	九八	九八	九七	九七	九七	九七
	二八	三三	三五	三九	九九	九九	九九	九九	九八	九八	九八	九八
	二二	二七	二九	三一	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	九九	九九	九九	九九

備考 西部小學校ハ昭和二年四月一日開校

るので、残る民團の父兄の力が弱い爲である。しかしさうした高級生活者の中には、子弟を祖國に學ばす爲め夫婦別居の餘儀ない暮をするものが多い。従つてこゝにも青島のやうに中學がほしいといふ聲が近頃漸く勃興してきだしたのである。

の會話に上されるこの土地である。國家の最前線に立つて活動するための語學の修養は、内地の中學ではとても得られない。東亞同文書院のやうに高級な人々を收容するのも必要であるがしかし同時に在留上海もしくは長江沿岸の日本人の子弟に必要な商業上の智識、中等教育を授

今日迄の民團の人々は長崎や熊本、北九州の人々で自分等の若い時、あまり中學校を知らない連中が多かつたので、知らず／＼さうした要求もしなかつたが、さて今日になつてみると中學校を出ない會社や商店で働きが出來ぬ中學校でなくとも實科商業でもよい。内地の子供どもがつて支那語と英語どが日常

くることは更らに焦眉の急務であると信ずる。聞く所によると今日の民團には設立の方が無い維持はして行ける見込があるから、設立だけはやつてほしいと云ふてゐる。予は日本の富豪でなくとも、さうした文化施設に對して出しよう財が無いとは考へられない。速にさうした希望は充たされねばならぬと思ふ。

上海でさうした邦人紡績などの活動の外に、今日、大に光つてゐるものは、駐在せる八百の陸戦隊である。装甲自動車六臺機關銃若干、市の一角に屹然として守備についてゐる。勿論江上には英、米、伊佛の警備船があるし、陸上には英兵二千の駐兵もあるが、しかし日本人の眼にはこの日本兵の守備程うれしいものはない、これは單に日本人の安全保障のみでなく、支那人の爲めにも、これあるが爲めに安全地である故に租界内では道落ちたるを捨はずといふ王者の平和境になつてゐる。予は支那の國情が安定して完全な法治國になる迄はかうした日本の犠牲的奉仕は絶對に必要であると考へてゐる。上

海のみでなく、漢口でも日本租界に居る支那人はその生命財産を安全に保護されてゐるからこそ、競ふて富豪の移住地となつてしまつて、日本人が借家をさがしても容易に見付からない現狀である。昔は秦始皇は天下の富豪を咸陽に集むること十二萬戸と稱された。さうした結果燦然たる西都の文華が發展したのであつたが、今日上海が東洋第一の開埠地となつて、誰しもがその三馬路、四馬路の熱鬧に驚き、堂々たるバンドの洋館の櫛比に刮目するのも、蓋し實に天下の富豪の總匯であるからではないか。外國租界の安全が消極的に働いて、天下の富豪を集中した結果こゝに驚くべき繁盛を招いたとすれば支那の文化のためにも、駐兵は今の所最も天意に合した行爲であると考へられる。規律嚴肅秋毫も犯さない所の我國の兵士諸君の日々の辛勞に對して感謝するものは、豈啻に日本人のみではなからうと信ずる。